ニュース

第25回記念ミツバチ科学研究会開催

新年恒例のミツバチ科学研究会は，2003年で第25回を迎え，記念研究会が1月12日（日）に玉川大学農学部第2校舎502番教室で開催された．記念研究会として講演者を募集し，10名の方々による発表が行われた．参加者は学外から230名と盛会であった．発表者を以下に記した．本号に原氏，高橋氏，緑川氏の発表を，次号24巻2号に久志氏の発表，参加記事を掲載の予定．

開会に際して

「第25回記念ミツバチ科学研究会を迎えて」
　吉田忠晴（玉川大学）

講　演

「専門高校におけるセイヨウミツバチの教材化—自然，人，ミツバチのリンク—」
　原　敬一（岡山県立高松農業高等学校）

「オオスズメバチ遮断柵」
　久志冨士男（長崎県佐世保市）

「蜜蜂保護，スズメ蜂捕獲器の開発について」
　大竹茂理（群馬県前橋市）

「日本ミツバチ，西洋ミツバチ共用人工巣脾」
　藤原誠太（日本在来種みつばちの会）

「3段群，4段群の継ぎ箱採蜜ローテーションについて」
　田口迪太郎（神奈川県相模原市）

「電磁波による蜂の産卵減退の調査確認手法についての提言」
　中西一巳（静岡県藤枝市）

「マヌカ・ハニーの特異性」
　高橋　襄（有限会社エム・エス・イー研究所）

「栄養の宝庫“蜂っ子”」
　鳴海周平（株式会社ナルミ）

「アジアのプロポリスの物理化学的多様性」
　笠原麗美（玉川大学大学院農学研究科）

「ブラジル産プロポリスの品質評価について」
　緑川　淑（日本プロポリス株式会社）

一般報告

「第6回アジア養蜂研究協会大会，第14回国際社会性昆虫学会議」
　小野正人（玉川大学）

特別講演

「ミツバチの脳はどこまで賢いか？—21世紀COEプロジェクトとミツバチ研究—」
　佐々木正己（玉川大学）

ミツバチの害敵，スモール・ハイブ・ビートル

1998年6月に米国フロリダでセイヨウミツバチから発見されたスモール・ハイブ・ビートル（英名：Small hive Beetle，学名：*Aethina tumada* Murray）は，その後，米国の12州に広がり，2002年には，オーストラリアのニューサウスウェールズとクンズランドの2州で確認された．この虫はアフリカ原産で，体長は約5mm，黒褐色のケシキスイムシ科の甲虫である．幼虫がスムシのように巣板に入り込み，花粉や，貯蜜，蜂児を食害して被害を与える．またハチミツ中に排泄する糞によって発酵や変敗が起り，ハチミツの品質低下や蜂群の逃去も見られるという．甲虫の生存には10℃以上の暖かい温度が必要で，強群での被害は少ない．巣箱下部や周辺の土壌消毒で甲虫の侵入防止の報告あるが，現在防除法について検討されている．日本には，同属のドウイロ（他にマエアカ，コクロ）ムクゲケシキスイの3種が生息しているが，ミツバチに対する被害は全く報告されていない．

編集後記　国際社会性昆虫学会議でのダイアナ・ホイラー教授の基調講演の内容を組織委員会，本人の快諾を得て掲載することができた．1月の研究会は，養蜂家にとって関心のある内容が多く，熱心な聴講の雰囲気が伝わってきた．その中から3人の方々に講演内容を紹介いただいた．塩澤氏のキイロスズメバチの巣を何個も合体させる記事と，小野助教授による関連の内容を合わせて掲載することができた．　（忠）